緋弾のアリア～～縛られた銃～～

緋色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾のアリア～～縛られた銃～～

【Ｎコード】
Ｎ９３９３Ｎ

【作者名】
緋色

【あらすじ】
ある一人の少年は悟った。”世界は偽りだらけだ”と。
暗い世界を生きた少年は、全てを捨てて平凡な武偵になることを決意する。
だが少年には平凡など来なかった・・・・・。

プロローグ（前書き）

勢いで書きました。

プロローグ

ある海に浮かぶ巨大な要塞。

そこの司令室。

「隊長！Ｂブロックが制圧されました！！」

「何だと！？」

「隊長！アチラはもうすぐこちらにたどり着きます！！」

「何をやっておるのだ！！相手はたった一人だぞ！！」

檄を飛ばす指揮官らしき男。

「こうなれば・・・・ここを放棄して脱出するしか道は・・・・・・！！」

ドカァァン！！

「――――――それにはおよばない」

扉の一つが破壊されて、そこから黒い長コートを着た少年が入ってきた。

「こ、この――――――化け物！！」

指揮官らしき男が拳銃を取り出す。しかしその前に・・・・・・。

ドンッ！

「喋るな」

男の脳天を、少年の銃から放たれた銃弾が貫いた。

「う・・・うわぁあああああ！！」

そこにいる奴らは、リーダーが殺されたことによりパニックになる。

「黙れ」

少年はそこにいる奴らを、全員気絶させて、自爆スイッチを入れた。

「弾がもったいない」

と言うわけらしい。

そして少年は基地から脱出して、海岸に止めてあるボートの方まで歩く。

ドカァァァァァアアン！！

先ほどの基地が自爆した。少年は見向きもせずに歩く。

そして海岸に着いたときに、基地から吹っ飛んできたであろう奴らが、海岸で呻いていた。

「いてぇ・・・・いてぇよ~~・・・・」

「助けてくれ・・・・・・」

身体中に火傷を負っているが、まあ助かるレベルだった。

だが、ここにいる少年は・・・・。

ドンッ！ドンッ！

呻いていた奴らの銃を奪い、一人残らず撃ち殺した。

「お望みどうり、楽にしてやった」

そして少年はボートで、炎上する島から立ち去る。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

――――――チュンチュン。

「・・・・・ん？・・・・・・・・・朝か・・・・・・・・・」

小鳥の囀りが聞こえる朝。

どこかの寮の一人部屋で男が起きる。

「あ～～あ・・・嫌なの見たな・・・・・・」

男はボヤキながら、服を着替える。

「朝飯は・・・野菜ジュースでいいかな・・・・」

男は冷蔵庫からジュースを取り出し、それをゴクゴク飲む。

「いつもの装備でいいな」

男は、銀のマグナム《S&W　M629（6インチ・バレル）》を腰のホルダーにしまう。

「さてと、行きますか。武偵校へ」

男はガチャリと扉を開ける。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

初めましてだと思う。

俺の名前は朱智一（あけちはじめ）。普通の名前だと思う。

武偵校の、探偵科（インケスタ）と言う場所に通う高校二年生だ。

今日はそこの始業式なんで、学校の寮から出たところだ。

ちなみにバスも出ているが、俺は乗り物が嫌いなためいつも歩き。

武偵校ちょっと前まで来ると、生徒達が”おはよう”なんて和気藹

々としている。

まあ始業式だしな、テンションが上がるのも判る気がする。俺にそんな気は無いが。

ついでに言うと、俺は人付き合いが苦手なため、友達と呼べるものも少ない。

いるとしても、みんな社交的ではない人種だ。

まあこれは普通の高校でも大差は無いだろう。

でも俺の通うこの学校はまったくもって普通ではない。

どうして普通ではないか、解説しよう！

東京武偵高校とは？

レインボーブリッジ南方に浮かぶ南北およそ2キロ・東西５００メートルの人工浮島に設立された、武偵を育成する総合教育機関。

一般教育の他に武偵の活動に関わる専門科目を履修でき、学園や民間からの依頼を受けてそれをこなす事も授業の一環とされている（報酬は任務を遂行した本人に支給される）。

校則により校内での拳銃・刀剣の携帯が義務付けられており、制服は男女共に防弾繊維を使用した『防弾制服』である。

進級に必要な単位は授業の他に、学園に寄せられる依頼をこなす事で獲得できる。

それでも単位が足りない場合は、休み中に解決すべき任務を学園が割引価格で引き受けてきた緊急任務で補う事が出来る。

これぐらいだな。な？普通じゃないだろ？

専門科目の一つ、強襲科（アサルト）って場所は、年間で三人は死んでいる。あ、事故とかじゃないから。学業中に死んでしまうんだ。

俺は自殺願望者では無いので、探偵科（インケスタ）という一番安全っぽい場所に通ってる。

ちなみに俺はCランク武偵だ。ここもきわめて普通。

自称”普通を愛してやまない武偵”で通ってないぜ。誰も呼ばないから。

ついでに武偵についても解説しよう。

これを読んでるからには分かってるだろうが、武偵とは武装探偵の略。

凶悪化する犯罪に対抗するために新設された国家資格のことだ。

武偵免許を持つものは武装を許可され、逮捕権を有するなど警察に準ずる活動が可能になる。

しかしあくまで武偵は金で動き、金さえ貰えれば武偵法の許す限りどんな仕事でも請け負う『何でも屋』の側面がある。

あと世界的に有名な、シャーロック・ホームズが武偵の原型らしい。

こんな感じだ。

わざわざ高校生にやらせなくてもいいだろ？こういうのは成人の人らがやるべきだ。

おおっと、そろそろ学校に着くな。一旦考え事を中止しよう。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xx

「かったり～～・・・・・」

超長かった始業式も終わり、俺は探偵科の教室へ向っている。

ちなみに一人だ。友達いないからな。しかしそれでもいいと思ってる。

俺は平凡を目指す武偵だからな。人と関わるとそれが崩れる。

しかし俺の知り合いには、レベルが高いやつしかいないんだよ。

例えば・・・・・。

「ハジメさん」

向こうから俺を呼ぶ、体は細くショートカットな美少女。

「よ、レキ」

二年C組で専門科目は狙撃科(スナイプ)。ランクはSという天才少女。

名字を知る者は無く、本人も知らないらしい。

無口・無感情・無表情のため『ロボット・レキ』というあだ名を持つ。

目立たない感じの少女なのだが、密かなファンクラブとかも作られているらしい。

レキと知り合ったのは・・・・まあ仕事だったな。

「俺に話しかけてくるって珍しいな」

「そうですか？」

「ああ。で、何か用なのか？」

「はい。実は今日、仕事が入ったのですが、少し装備が足りないので・・・・」

始業式で仕事か。忙しい子だな、レキさんや。

「買いたいと。いいぜ、何をだ？」

「閃光弾（フラッシュ）を五発程度」

「おいおい・・・何をする気だよ」

「お気になさらず」

「そうか。ま、そっちはそっちで頑張ってくれ。ホラよ」

俺はポケットから、閃光弾を五発取り出して渡す。

「ありがとうございます」

「おう。金は後で払ってくれればいい」

「わかりました。では」
そしてレキは自分の教室の方へ向かう。
「武器商人ってのも結構儲かるな」
そして俺も自分の教室の方へと向かう。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「今日は新しい子紹介しますよ〜〜」
俺は教室の自分の席に着き、なるべく目立たないように気をつけながら、ポケーっとしてた。

そしたらこのクラスの担任、小長谷（こながや）先生が入ってきて、そんな事を口走る。

ちなみに。

小長谷先生、（名前は美里）は、茶髪のショートヘアーで、大体スマイルなのが特徴だ。

だが先生の専門は強襲科。人を見た目で判断しちゃダメだな。

「先生！！性別は！？」

「女子ですよ～～」

『イェーイ！！』

女子と知ってクラスメイトの男子が、下心丸出しの歓声を上げる。

女子の殆どが引いた状況だ。当然俺も引いたが。

「じゃ、入ってきて～～」

先生の声で、教室のドアがガラッと開く。

入ってきたのは、ピンクのツインテール髪に瞳も赤で、小学生のような体型で、人形のような愛らしい美少女。

特に興味も無いが。一部男子がうるさい。

「神崎・H・アリアよ」

感想は、変わった名前だな。以上。

ん？よく見るとクラスメイトの遠山が、芸人みたいにずっこけてる。

「先生。アタシ、アイツの隣が良いです」

どうやらあの女子は遠山と知り合いらしい。

「はい、キンジ」

そして女子はベルトを投げる。どうやら遠山のベルトをなぜか彼女が持ってたらしい。

そしてクラスがちょっと”シーン・・・”とする。

「はいはーい！理子わかっちゃった～～！！」

ウザイ口調の女子は峰　理子。

探偵科の女子で、ランクAというエリートだ。

長い金髪をツインテールっぽく結った、ゆるい天然パーマが特徴の童顔の美少女。

武偵校の制服をフリルだらけの改造制服にして着ているなど、変わった性癖の持ち主で、このクラスではバカキャラって立ち位置を確立してる。

「キーくんはベルトしていない！そしてカワイコちゃんがキーくん

のベルトを持っている！
つまり、キーくんとカワイコちゃんは、ベルトを外す何らかの行為をしていた！
つまり恋仲ってコトだよ！」

ワァー！！パチパチ！ヒューヒュー！

クラスの皆がはやし立てる。

でも何で、ベルトを持つ＝恋仲なのだろうか？よくわからない・・・・。

バンッバンッ！

何か顔を赤くした女子が銃を発砲する。まあ発砲自体は許可されてるからいいけど。

「こ、恋なんて！時間のムダよ！」

おっ、俺と同じじゃないか。ちょっと親近感が沸いた。

「今後！そんな事いうヤツは！風穴あけるわよっ！！」

物騒な自己紹介だな。ここだから許されるが、普通の高校ならどうなるか・・・・。

まあそんなこんなで紹介は終わった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「あ～～あ・・・・暇だ」

俺は授業も終わり、俺は一人食堂で飯を食っている。

ここの食堂は、まあ税金で賄ってるので、結構うまい。

俺はきつねうどんを食べている。コシが効いててクセになる。

「ねぇ。ちょっと良い？」

「・・・・・・・・・・」

「ちょっとアンタ！聞いてんでしょ！！」

「・・・・・・聞いてませんけど」

「返事を返してるじゃない！」

神崎が俺に話しかけてきた。

今は、この武偵校で一番マシな時間を過ごしてるのに・・・・。

「それで何か用でも？」

「貴方クラスメイトでしょ？キンジについて知ってる事ある？」

「キンジ？・・・・・ああ、遠山のことか」

一瞬誰なのかわからなかった。

「えっと確か・・・・特務武偵所属の遠山金一って兄がいたな」

ちょっと思い出すな。あの愚直にも正義を目指す武偵を。

「へぇ。他には？」

「一時期・・・強襲科にいたな」

多分だが。

「他には？」

「それぐらいだ」

「そ。ありがと」

そしてパタパタと急ぎ足でこの場を立ち去る神崎。

「さて、うどんを食べるか」

特に何も思うことは無く、俺はうどんをすする。

ｘｘ

「暇だな」

放課後。俺はテキトーな場所をブラブラしてる。

まあクセで。

「一」

「ん？　なんだお前か雫」

「なんだって・・・・ヒドイよ一」

「すまんすまん」

俺を呼ぶ物好きな人種の一人、笹川雫（ささわがしずく）。

専門科目は諜報（レザド）科で、これまたSランクと言う天才少女。

金の髪を膝まで伸ばしていて、トレードマークの二つの赤いヘアピンが特徴。

しかし物凄く気が弱いため、あまり人付き合いは得意ではない。

「もしかしてアレか？」

「うん。一の言ったとおりだった」

「そうか・・・・面倒なことになった」

「私も出来るだけサポートはするよ」

「そうしてくれると助かるな。俺は平凡な武偵になりたいし」

「平凡って・・・武偵である限り、平凡なんて無理じゃ・・・」

「だからさ。普通の仕事して、普通のお金もらって、普通の暮らしをするんだよ」

「・・・・・・・まあいいけど」

そして回れ右して、この場を立ち去る雫。

「・・・・・・・・・寝るか」

俺は自分の部屋に戻った。

これが俺の愛してやまない日常だな。

面白くもなんとも無いだろ？だが、日常ってのはそういうもんだ。

面白すぎても困るだけだし、俺は今の日常が好きだしな。

・・・・・・・・・・・・まあ、そんなにうまくいかないのが、

人生なんだろうな。

俺の日常は、核爆弾投下されたみたいに蒸発して消えたさ。

プロローグ（後書き）

うん。マジで勢いだけですね。

仕事仕事・・・

次の日の朝。

なぜか俺は強襲科(アサルト)に呼び出された。

なぜ・・・・・。俺には理由が分からん。

「朱智君。何で貴方を呼び出したか分かりますか？」

おお、小長谷先生。今それを考えてましたよ。

「まったくわかりません」

「そうですか。では理由を話しましょう」

鋭い眼光を飛ばす小長谷先生。

普段からは、想像できないような無表情が怖い。

そんな顔しちゃダメですよ。貴方には隠れファンも多いらしいですし。

「強襲科に一度、編入して貰いたいんです」

分かるわけ無いでしょ、そんなの。

「なぜですか？」

「校長からの命令ですので。異論は認めません」

ヒデェ！

「・・・・・・・・わかりました。で、何をすれば？」

「”普通にしてくれればそれで構わない”と」

「・・・・それだけですか？」

「はい」

「わかりました。失礼します」

ガラガラッと俺は扉を開けて、部屋を出て行く。

「あ～～あ・・・・校長め・・・・・今度、Ｃ４爆弾の小包を送りつけてやろうか」

あの人には恩があるが、それ以上に嫌がらせを受けている。

「なんで『明日無き学科』に行かなければ・・・・・・」

そう思いながらも俺は足を進める。

「教室行くか」

そして特に意味も無い一日を過ごした。

X　X　X
X　X　X
X　X　X
X　X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
また来ちまった。この世の終わり。強襲（アサルト）科に。

詳しい説明は省く。俺は言いたくない。

「おう。朱智。お前もここに戻ってきたのか！」

「そうかそうか！じゃあ死んでくれ！」

「黙っとけ。暑苦しい」

強襲科の奴らはこうも”死ね”が口癖なのか。

「そういや、遠山も戻ってきたんだな」

知らないし、興味も無いが。

「さて。普通にしてるか」

俺は普通にそこらへんでダラーンと寝転がる。

「こ〜〜ら。何してるの」

ごろごろ寝ている俺を見下ろすのは、雫・・・・いや。

「何か用か。俺はもうそっち側じゃないぞ。『魔術師＜マジシャン＞』」

「やっぱりバレますか」

そういって変装をとく男。

その男は超長い黒髪の一見女に見えるが、一応男な優男。

「リン＝シャオリー。なぜ俺に関わる？何を言われようと俺は戻らん」

「僕は友達に会いに来ただけですけど？」

「やめろその笑顔。うっかり殺したくなる」

「ひどいですね。ま、いいですけど」

「じゃあ帰れ」

「そうも行かないので。ちょっと話に付き合ってください」

「そうか。勝手に喋れ」

「では勝手に喋りますね」

すばやく武偵校の制服に着替えて、俺の隣に座る。

「イ・ウーの事は聞いてると思います。そのメンバーが貴方のクラスの、神崎・H・アリアと遠山キンジを狙っています。それも複数。この情報をどうするかは貴方次第です」

そして立ち上がりその場を去ろうとする。

「これは俺の独り言だ。気をつけろよ。奴らは一枚岩ではないからな」

俺の言った言葉に驚いた様子のリン。俺がこんな事言うなんてないだろからな。

「ハハッ。忠告ありがとうございます」

そう言って消えるリン。

「・・・・・・・Hの子孫とアイツの弟・・・・・か」

俺にどうしろと。助けりゃいいのか？

「仕方ない。久々の仕事でもしながら考えるか」

俺は強襲科の掲示板の方へ向かった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxx

「あれ？　ハジメ」

「ん？　雫か」

掲示板に向う途中、本物の雫に声を掛けられた。

「ハジメって強襲科に戻ったの？」

「ああ。校長に言われて無理矢理」

「そうなんだ。遠山君と同時期に戻ったって事で、ちょっと話題になってたよ」

「遠山だけでいいだろ。何で俺まで・・・・・」

完全にとばっちりじゃないか。俺は目立ちたくないのに・・・。

「ハジメって有名だから仕方ないよ」

「裏ではだろ？」

「でも隠す気ないでしょ？だから目立っちゃうんだよ」

「裏でも表でも俺は目立つのか・・・・・」

なんだそれ。拷問じゃないか。

「それに・・・・・カッコイイし（ボソッ）」

「ん？何か言ったか？」

「な、何でもないよ！？ほんとだよ！？ほんとだからね！？」

「べ、別に疑ってないが・・・・・」

何だコイツ。いきなり興奮して。
まあ一応話は逸らすかな。
「そうだ。お前今暇か？」
「うん」
「それじゃあ一緒に仕事しないか？」
「え？いいの？」
「むしろこっちがお願いしたいな。お前がいれば色々助かる」
そう。
コイツは科目こそは諜報科（レザド）だが、強襲科のSランクを倒せる万能美少女なのだ。
「じゃ、じゃあ行こうかな」
「おう。よろしく頼むな」
そして二人並んでまた校内を歩いて行く。
「そういえば二人で仕事って久しぶりだね」
「そうだな。1年ぶりか」
「ハジメってやる気なかったからね」

「お前は色々と忙しかったしな」

「でも、足引っ張らないでよ？」

「おいおい、それは愚問だぜ？まだ鈍っちゃいねぇよ」

「ふ～～ん」

クソッ。コイツって普段気弱なくせに、俺相手だとなぜか強気なんだよな。

そうこうしている内に掲示板にたどり着いた。

「何があるかな」

・麻薬密売組織の取引現場強襲及び調査。単位３・７。（指定科目なし。人数制限なし）

・要人主催パーティの警備。単位３・３。（強襲科一人以上必須。二人以上が好ましい）

・警察の夜間パトロールの補助。単位２・１。（強襲科・探偵科・諜報科。人数制限なし）

俺等二人で出来るのはこれぐらいだな。

「どれだろうか」

「私は何でもいいよ」

「そうか。じゃあ一番楽そうなパトロールにするか」

「楽ならパーティの方じゃないの？」

「要人の警護なんかやってられないだろ？」

「まあ私には向かないね」

「気が弱いからな」

「うっ！・・・・言わないでよ。気にしてるんだから」

「そう思うなら治せよ？」

「・・・・まあ、がんばる」

「それじゃ行くか」

俺はパトロールの張り紙を取り、受付で承諾書をもらう。

俺等は校舎を出て、専用のサイドカー「ＮＳＵ　Ｍａｘ」を改造したヤツ（名前は無い）の置いてある方まで向かう。

「バイク？」

「おう」

「乗り物嫌いなのに？」

「乗れんことは無い。むしろ得意だ」

「じゃあお手並み拝見かな」

「お前乗ったことなかったか？」

「うん」

「じゃあとくとその目に焼き付けろ」

そんなやり取りの中、俺はふと思い当たることがあったので聞いてみた。

「そういや、装備とかいいのか？」

「私は大丈夫だよ。ハジメは？」

「う～～ん・・・・このままでもいいけどな。一応部屋に戻る」

「そう？じゃあ私も一度戻るよ」

「じゃ。１５分後にここでな」

「了解」

俺と雫は一度分かれた。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxx

「ええ〜〜っと・・・・。弾の入ったポーチにホルダーベルト、一応もう一つ銃を持ってくか」

俺は部屋で色々と荷物を整理していた。

「確か・・・・ここに・・・・あったあった」

俺がベットの下から取り出したのは、グロック17。

３０年前の銃で、グリップとかがプラスチックだが俺は時々使う。

「今回はこれを持ってくか」

マグナムとグロックをホルダーに入れて、オートマのマガジンをベルトに引っ付ける。

ついでにポケットナイフも、名の通りポケットに入れた。

「ちょいと重装備か？」

まあ防弾制服にポーチをつけた程度だが。

そして部屋を出ようとすると、動かしたせいか上から黒い箱が落ちてきた。

「てっ！」

そして俺の頭に直撃、黒い箱から中身がこぼれる。

「これは・・・・・・・・」

中身は黒い長コートと・・・・・リボルバー式の黒い装飾銃。

「こんな場所にしまったのか・・・俺は・・・・・・」

一度それらを手に取る俺。

「やっぱ・・・・・捨てれないな・・・・・相棒」

俺はそれらを黒い箱に戻して、元の場所に戻しておいた。

「アレを使うわけにはいけない・・・・・・　俺が俺である限り」

俺は自室を出て、待ち合わせ場所に向った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「遅いよ」

「お前が早いんだ」

待ち合わせ場所に行くと、ちょっと装備を固めた雫がいた。

具体的に言うと防弾制服を着て、揺れるスカートの中に二丁の拳銃。腰にはマガジンをつけたベルトをしていて、靴下には暗器らしきナイフがいくつかあるって感じ。

「そろそろ行くか」

俺はヘルメットを投げ渡しながら、オートバイの方に乗る。

「わかった」

雫はヘルメを被ってトライクに乗る。

「どこに行くの？」

「もう連絡は行ってるから、ただ街を回ればいいと思うぞ」

「そう。じゃあ二人っきりだね」

「そうなるな。まあ、話しながら走ってりゃあ終わるだろ」

「だね」

そして俺等は夜の街をバイクで走り出した。できれば何も無く終わりますように・・・・。

仕事仕事・・・（後書き）

誤字脱字、感想お願いします。

序章・・・？

「いい風だな～～」

「ホント～～」

俺等は今、夜の街をバイクで走り出してる。

薄暗い街、人々の話し声、走るたびに当たる風、どれをとっても最高～～。

「何も起きないね」

「そのほうがいいだろ？ただ走ってるだけで、単位もらえるなんて最高じゃないか」

「そうなんだけど・・・・・ね」

「？」

なぜか暗い表情をする雫。ま、触れないで置くか。

「しかし警察官に会わないな」

「そうだね。一人ぐらいいてもおかしくないと思うけど・・・」

俺等が走り始めて1時間ちょっとになるが、警察官が会わないどころか見もしないのだ。

「まあ偶然が重なっただけだろ」

「そだね」

俺等は特に何も思わず、パトロールを続行する。

「あと1時間ぐらい走った後、局に連絡して任務完了だ」

「そうだね・・・・・・・ねぇハジメ」

「？　なんだ？」

「ハジメって何で――――――――――」

ドカァァァァアアンッ！！

「「！？」」

雫の言葉を遮るように巨大な爆発音が鳴る。

「行くか」

「うん」

俺等は爆発のあった場所へと向う。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

『こちら警視庁。現在パトロール中の全車両に告ぐ。18：30に東京都中心区の高層マンションで爆発。原因は不明。各車両は速やかに現場に急行されたし。繰り返す。こちら警視庁――――――』

「だって」

「マジかよ・・・・」

俺等は爆発のあった場所までバイクを走らせる最中。

そして、受付でもらった専用の通信機からこんなのが入ってきやがる。

「俺等も行くべきか？」

「一応連絡しておこうよ」

「だな」

雫は自分の携帯を取り出し――――――――――っておい。

「お前携帯持ってたか？」

「・・・・・・・・ゴメン」

「ったく機械オンチめ。俺の使え。トライクの中に入ってる」

「うん」

そしてトライクから俺の携帯を取り出して、ピポパと電話をかける。

「あ、もしもし。笹川ですけど・・・・小長谷先生はいますか？・・・・・・・・・・はい、わかりました。ちょっと待ってください。ハジメに変わってだって」

「おいおい。俺今、手が離せないんだが」

「ちょっと待って。すいません。朱智君は今手が離せなくて・・・・・・・・・・え？そうなんですか？ちょっと待ってください。ハジメ、インカムもらってるはずだって言ってるけど」

「？　ああ、そういえばもらってたな」

腰のポケットに入れてたことをすっかり忘れてた。

「はい・・・・・わかりました、失礼します。そっちに掛け直すって」

「了解」

俺は片手でインカムをつけると、ちょうどそこから通信が入る。

『朱智君。小長谷です。一応貴方が任務受諾者だったので貴方に指示を出します』

「了解です」

『まずは爆発現場に向ってください。私もそちらに向う予定ですが、おそらく事態は一刻を争います。指示は通信科(コネクト)の子に継ぎます。あとは現場の指示に従ってください。ですが独断行動権を与えますので二人で当たってください』

「了解」

『・・・・・くれぐれも正体がばれないように。では、気をつけてください』

「わかってます。では」

通信が切れる。俺は言われたとおりの事を雫に言う。

「雫。ズバッと話すと、今すぐ現場に向って事件に当たれ。そして

独立行動権をもらったから、独自の判断で行動しろ・・・

着いた場所は高層マンション・・・・立地条件がいいところだったかな。

すでに警察の手で黄色いバリゲートが張られているが、その周りをスゴイ数の野次馬が囲む。

「中空知。どこ行けばいいか、わかるか？」

『ちょっと待ってください。・・・・・・・・裏手の方に警察の方々がいます』

「サンキュ」

俺は言われた通り裏手に回ると、警察の方々があれやこれやと話してるのが見えた。

「すいません。武偵校の者ですが」

俺と雫はバイクから降りて、警察の人達のいる方へ向かった。

「おお君らか。連絡は来ている。すまないね、ただのパトロールで終わるはずが・・・」

一人の大柄で、白髪の入り混じった頭をしたジジイが反応を返してくる。

「構いません。現状はどうなっていますか？」

「爆発されたのはマンションの２５階。最上階すべてを複数の爆弾で同時にだ。犯人からの要求などは不明。さいわい怪我人や死亡者

はいない。しかしまだ爆弾がある可能性があり、迂闊に突入できない状況だ」

「了解です。自分達が先に様子を見に行きます」

「なんと！！大丈夫かね！？」

「はい。出来れば二人だけで行かせてもらえませんか？」

「わかった。そちらに任せよう」

「ありがとうございます」

そして一度雫の方を見る。

「大丈夫だよ？私は」

「そうか。それじゃあ行くか」

「健闘を祈る」

なんか敬礼された。死ぬわけ無いだろうが。

そんなこんなで俺等はマンションの中に入っていった。

XXXX

「は？味方が来た？」

「ちがうって！」

そう言って拳銃を取り出す雫。

ちなみに二丁ともブレン・テン。開発してから3年で生産中止となったレア物の銃だ。

まあそこらへんの銃より使えるけどな。

それはそうと。

エレベーターはちょうど二十階で止まり扉が開く。

「誰もいない」

「ホント？」

俺と雫は無人らしきエレベーターの方に歩く。

「別に何も無いな」

「誤作動？」

中をのぞいてみるが特に何も無く、これ以上ここにいても無駄だと思ったので、ここを立ち去ろうとすると、いきなり雫が声を荒げてくる。

「ハジメハジメ！これ！！」

「ん？・・・・・・おいおい、マジかよ」

指差されたのは天井の張り紙。そこには数字の羅列が書かれていた。
これは・・・・・・。

「クロノナンバーじゃねぇか・・・・！！」

ある場所で使われる、数字の数と順番で作られる暗号。
訳すると　ワタシタチハ　オクジョウニイル　サッサトコナイト
コロシテシマウゾ。

「冗談じゃない・・・・・今の装備じゃ足りねぇ・・・・」

「でも・・・・行かなきゃいけないね」

「わかってる」

俺等はさらに階段を上がる。

二十五階に来たが、そこは物が吹っ飛ばされてるだけで、火などは
上がってない。

「窓とかを吹っ飛ばしただけみたいだね」

「ああ。さすがとでも言っておくか」

見事に騙された警察の人らを尻目に、屋上の扉を空ける。

「待ちくたびれたぞ」

「待ってました」

屋上の一角で立っているのは、ダンディな男と若い女性。

二人はそれぞれ槍とサーベルを持ってる。

「まさかあんた達がここに来るなんてな」

「・・・・・・・・・・・・」

俺は軽口を叩き、雫は物凄い形相で睨んでる。

「セフィリア＝アークスとベルゼー＝ロシュフォール・・・・・・何か用か？」

「大層な口を叩くようになったな。若造」

「うっせ。マグナムをぶっ放すぞ」

俺はホルダーから銃を取り出す。

「やるのか？今のお前が私と」

ベルゼは槍を構える。

「おもしれぇ・・・！」

「ストップです。我々はそのようなことをしに来たのではない」
セフィリアの剣が俺等二人の間に入る。
「そうだったな」
「で、結局何のようだよ」
「リン＝シャオリーから聞いてると思いますが・・・・・・こちらに戻ってはくれませんか？」
「「断る（ます）」」
俺と雫は同じ言葉を返す。以心伝心。
「・・・・・・まあ、そういうのは分かってましたが」
セフィリアは答えが分かっていたように脱力した。
「じゃあ何で来たんだよ」
「ある方からの忠告を伝えに。”敵はすでに迫ってる。だが、過去を背負えば撃ち抜けるだろう”と」
「・・・・・それだけか？」
「ええ」
「それだけのためにあんた等が来るとは」

「本当は貴方の武器を奪おうと思いましたが、持って無いのでは話になりませんから」

「アレを持って無い貴様など、赤子を捻るように倒せる」

二人から殺気を放たれる。

「俺はあの力を使わない」

「私もです。Ｎｏ．？　Ｎｏ．？」

その言葉を聞くと同時に二人の体が浮く。

「ならば、私達は戦うことになるだろう」

「それまで生きていてください。始の姫（イヴ）そしてＢＬＡＣＫ　ＣＡＴ」

そして二人の姿は消失した。

「・・・・・・波乱万丈だな」

「そうだね・・・・・でも止まる気は？」

「ハッ。あるわけねぇよ」

そして俺たちは屋上から降りた。

これからが大変なんだろうな・・・・・・・・。

だが止まらないぜ？退屈な日常も・・・・面白い日常も嫌いじゃないからな、俺は。

序章・・・？（後書き）

難しい・・・・・。

先に言っておいて

色々とあった昨日を忘れたいと思う今日。

スゴイ豪雨が降りしきるので学校に来るのも一苦労だった。

結局あの事件は、何処かのやろうが爆弾を作ってイタズラしたって事になった。

警察は真実を知らないで、その居るわけない犯人を捜査中だとよ。

後で来た小長谷先生に一応真実を話したら、他言無用と言われてしまった。

だがちゃんと単位はもらえてよかったぜ・・・・。

で、今俺は教室で勉強している。

ちなみに一時限目の理科だ。

遠山と神崎と武藤がいないが、まあ別に気にしなくていいだろ。

しかし勉強って面倒くさいな。正直暇だ。

ブルルルルルル。

「？」

これは俺のポケットに入ってる携帯のバイブレーションだな。

授業中だが、緊急の用かもしれんし出るか。

「もしもし」

『私です』

おお、この無感情の声。レキだ。

「どうした？」

『出来れば今すぐに来て欲しいのですが』

「授業中だろ？」

『いえ。私は今仕事をしています』

「へぇ。何のだ？」

『武偵校のバスがジャックされたので、その増援として』

「そうか。で、何で俺が？」

『戦力が足りないと、私が判断しましたので』

「そうか。ちなみに他に誰が居る？」

『神崎さんとキンジさんです』

そうか～～、あいつら仕事があったから、学校来れて無いんだな。

・・・・・・・・・・・・・・・・・は？

「遠山と神崎！？」

『そうです』

「すぐに向う！！場所はどこだ！？」

『今は台場の湾岸道路です』

「わかった！！」

俺は携帯を切って、帰り支度をする。

「あ、あれ！？朱智君！？どうかしたんですか！？」

授業担当の先生が驚いてこちらを向く。ついでにクラスメイトも。

「え～～っと。武偵憲章一条！『仲間を信じ、仲間を助けろ』なわけで帰ります！」

「ちょ、ちょっと～～～～！！」

涙目で叫ぶ先生を尻目に、俺は寮の部屋に戻った。

x　x
x　x
x　x

「銃は、もうなんでもいいか」

で、マグナムを持って行くことにした。

「たくよぉ！どうして俺がこんな事を！！」

俺はヘルメットを被って、バイクに乗り、寮を出る。

「間に合ってくれよ・・・・！」

そして、俺は豪雨の中バイクを走らせた。

X　X　X
X　X　X
X　X　X

「どこにいるんだ・・・・」

俺はバイクで豪雨の中をひたすら走っている。

バスが起こしたと思われる事故の残骸を追跡しながら走らせてるが、雨の中とあってスゴイ惨状となって進むのも一苦労だ。

俺は無断で飛び出したからインカムとかもないしな。運転中は携帯使えない。

「くそっ！車邪魔だ！！」

俺はあちこちに散らばる車に、悪態をつきながら俺はさらに走らせる。

ドガァァァァァン！！

「！？、今の音は！！」

おそらくバスが引き起こしたであろう事故の音だ。

結構近い――――――――。

「間に合ってくれよ！！」

さらにスピードを上げて（法廷速度は守ってる）俺は向う。

「見えたぜ・・・・！」

ついにバスの姿を発見した。

左右の窓はすべて割られていて、車体の所々に衝突したような痕がある。

俺は横にバイクをつける。

「お前は・・・・朱智！？」

窓から顔を出す遠山。C装備に身を包んでいるが、ヘルメがない。

「よぉ遠山。大変なことになってるな」

「何やってんだ！！いますぐここから離れろ！」

「悪いが無理だな。――――――――ん？遠山！！頭引っ込めろ！！」

「！？」

バスの前方に陣取ってるルノー・スパイダーが、UZIをぶっ放す。

遠山は咄嗟の事で反応できていない。

「――――――クソッたれ！！」

ドンッ！

俺はすばやく腰のマグナムを撃つ。

俺の弾丸は、迫ってくる弾丸の一発を弾く。

そしてその弾いた弾丸が別の弾丸を弾く。

それがどんどん繰り返されていき、アチラの弾丸はすべて弾かれた。

そして、その弾いた弾丸の一部が、壁やら道路やらにぶつかりながら、ルノーの方へ向かい――――

すべての銃器を破壊した。

俺の――――――たった一発の弾丸によって。

「お、お前・・・・・・」

遠山が俺を見て呆然としてる。

「気を抜くな！」

パァン！パァン！

俺の言葉とほぼ同時に、破裂音が響いた。

音に続いて、ルノーは急激スピンをして、ガードレールに衝突した。

ルノーを撃ったやつは・・・・・・武偵校のヘリにいるレキだな。

パァン！パァン！パァン！

次の瞬間、再び破裂音がなり、道路に爆弾が出てきた。

部品がすべて取られているがな。

「最後くらいは俺がやる」

俺はマグナムを三連射して爆弾を宙に上げて、橋の下の海のほうへと落ちて行く。

――――――ドウウウウッ――――――！

なぜかは知らないが、先ほどの爆弾が海中で爆発した。
そしてバスは減速していき・・・・・停まった。
俺もそれに習うようにバイクを停めた。
「「朱智！」」
誰かが俺の苗字を呼ぶ。
誰かと思ったら、遠山と武藤だった。
「おっす。オラ朱智。メンドー事が嫌いな高校二年生だ。ってな訳で帰る」
「何が”ってなわけ”だ！！」
「お、お前何をしたんだよ！？」
遠山と武藤が言い寄ってくる。キモイからやめろ。
「お前らを助けた。それだけ。じゃあな」
一言口にして、その場でUターンする。
「あ！おい！」
後ろでなにやら、叫び声が聞こえてくるが・・・・・無視だぜ。

X　X
X　X
X　X

理由？それはね・・・・・・。

「俺がいなくても解決しただろ！！」

「それは結果論ですから」

「いや。お前一人で充分すぎるだろうが」

「わかりませんでしたので」

「お前なぁ～～・・・・・ま、俺のお得意さんだがらこれで許してやるよ。・・・・だがな？」

俺は目を一度閉じて再度開く。殺気込みで。

「下らんことで俺を使うな。俺を飼えるのは俺だけだ」

「ッ・・・・わかりました。失礼します」

レキは、俺の殺気に一瞬声を詰まらせたが、得意の無表情に戻りこの場を去った。

「さてさて・・・遠山＋神崎がどうしてくるか・・・・」

神崎みたいなヤツなら、問答無用で掴みかかってきそうだな。

「・・・・考えても仕方ない。戻るか」

ってなわけで俺は教室に戻った。授業があるのでね。

ｘ　ｘ
ｘ　ｘ
ｘ　ｘ

「なあなあ朱智～。お前実はスゴイヤツ？」
「まさか。だたのCランク武偵だ。どこにでもいるな」
「じゃああの銃弾弾きはなんだったんだよ」
「偶然。この二文字しか言いようがない」
「そうか。まあそれでもいいか。それよりお前の持ってるバイク！あれ改造車か？」
次の瞬間、俺の手は武藤の鳩尾にヒットしていた。
「グフッ！」
「バカヤロ！そういうのはデカイ口で言うな」
「ぐぐ・・・・す、すまん。だがお前も少し・・・・手加減してくれ・・・・・」
「加減はした。ちょっと」
「・・・・ちょ、ちょっと・・・かよ・・・・・・ガクッ」
武藤は気絶してしまった。俺は邪魔にならない場所に引きずって置いといた。
「は～～い。席に着いてください～」
ちょうど担任の先生が入ってきたので、みんな席に着いた。もちろ

ん俺も。

みんな武藤はスルーしていたが。

x
x x
x x
x x x
x x x
x x x x
x x x x
x x x x x
x x x x x
x x x x x x
x x x x x x
x x x x x x x
x x x x x x x
x x x x x x x x
x x x x x x x x
x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x

次の日。週明け。授業中。

神崎が学校を休んだ。まあ人間風邪を引くときもあるな。

遠山がなんとも言えん顔で、神崎の席を見ていたときには笑えたぜ。

しかし自分の事で精一杯なのか、俺には何のアプローチもかけて来

なかった。

その方がいいけどな。俺には関係ないし。

そして探偵科の授業に耳を傾ける。

つまんない授業だが、聞かなければ成績を下げられてしまう。

まあ単位は揃っているのだが。

暇なので、新作の武偵弾のアイディアでも考えようか。

と言うわけで授業はすべて、武偵弾の新作アイディアのための時間とした。

すると、なんということでしょう！もう夕方になっているのです。

しかし、いいアイディアが思いつかなかった。

「暇だな・・・・・」

俺は何もすることがないので、さっさと帰宅しようと校舎を彷徨う。

「尾行が苦手なのは相変わらずか？」

俺の言葉に反応して、廊下の柱の影から人が出てきた。

「言ってろ。俺は美人な女でねぇと本領が出せねぇんだ」

「損な性格だな」

出てきたのは黒髪で長身の男。見るからに性格の軽い感じ。実際軽いけどな。

「ってかお前ら暇だな。天下の抹殺者(イレイザー)が四人もここに来るなんて」

「誰のせいだ。俺だって来たくねぇけどな、命令だから仕方ねぇ」

「俺に何の用だ。ジェノス＝ハザード 」

「メンドーだから言われた通りの事言うぞ。”運命の子達をイ・ウーから守れ”だとよ」

「そうかい。じゃあさっさと消えろ」

「そうしたいのは山々なんだが・・・・そうも言ってられねぇ」

「？」

なんだコイツの真剣な表情・・・・まさかまだ重要なことが・・・・・・！？

「雫ちゃんどこにいるんだ！？」

ズコッ！

柄にもなくこけちまった。ってんな事はどうでもいい！

「帰れロリコン！」

「黙れ！！俺のストライクゾーンは１６から３５まで・・・つまり雫ちゃんを口説いていいんだ！」

「広いなお前のストライクゾーン。それとロリコンの否定になってないぞ」

「黙れ！輪切りにすんぞ！？」

「さすがに理不尽だろ！」

「チッ。まあいい。それと護衛対象が成田の飛行機場にいるって情報がある」

「そうか。じゃあ一波乱ありそうだな」

「・・・・・バレんなよ」

「わかってるさ」

そして俺はダッシュして自室へと向った。

XXXX

「どういう格好で行こうか・・・・・」

変装できるようなものが俺の部屋に見当たらないのだ。

「・・・・・・仕方ないな」

俺はロッカーの上にある黒い箱を取り出す。

「これからの俺は朱智一じゃない」

俺は・・・中に入っている黒い長コートに手を通しながら呟く。

まるで自己暗示をかけるように。

そして黒い装飾銃――――――ハーディスを手に取る。

「使うことはないと思ってたがな・・・・・相棒」

俺はハーディスに銃弾を込めて、腰のホルダーに入れる。

「行くか・・・・・ＢＬＡＣＫ　ＣＡＴ・・・・トレイン＝ハートネットとして」

先に言っておいて（後書き）

突っ走った感があります。

俺必要だったか？

「飛んで飛んで飛んで～～～♪」

俺は歌いながら、コートを靡かせて空を飛んでいる。

なぜ空を飛んでるのかって？

俺が暇だから。これ以外に理由なし！・・・・・と言うのは嘘で。

「まさか飛行機がすでに飛んでるとは思わんしな」

まあ実は・・・・俺はすでに離陸してしまった、神崎＋遠山を乗せた飛行機を追ってる。

豪雨をものともしないで飛ぶ。疲れるが・・・・・仕方ない。

しばらく飛んでると、ようやく飛行機が見えてきた。

「・・・・・・・・さて。そろそろテンションの方も自粛しますか」

と言うわけで、昔の俺のテンションで行ってみよう。

「・・・・・・・・・行くか」

俺が銃を取り出して、飛行機への入口を作ろうとすると――――――。

ドゴォォォオオン！！

なぜかは知らないが、反対側から爆発音が聞こえて、そこから一人の人間が落ちる。

あの金髪ツインテールは・・・・・・・・・峰・理子。

なるほど。アイツが『武偵殺し』か。

だが今は追う気にもならんし、放って置くか。

で、俺は穴の開いた場所に向おうとすると――――――。

「・・・・・はあ」

ミサイルが機体に突っ込んできた。

俺は一つため息をついて、装飾銃を構える。

「・・・・・・・沈め」

そして引き金を引く。

ドゥゥゥゥゥゥウン！！

おそらく普通の拳銃からは出ないような音を出しながら、俺の銃弾

は黄色いレーザーとなってミサイルを打ち落とす。

そして俺は穴の開いた入口から、機体の中に入る。

「――――――誰だ！？」

ん？遠山・・・・・・普段と雰囲気が違うが、あいつの言ってたＨＳＳという奴か？

だが今は――――――。

「そんな事はどうでもいい。だが、俺は君と敵対する気は無い」

俺は無感情で言う。昔の俺はホントに無感情だったからな。

ちなみに今の俺は黒いコートを巧みに使い、顔を見えなくさせている。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

遠山は無言で俺を見据える。信用するかどうか迷ってるな。

しかし俺にそんな時間はない。

「時間がもったいないので先に行くぞ」

俺は遠山を放置し、そのまま操縦席へ向う。

「――――――おい！？お前！！」

何か騒いでいるが・・・・無視だな。

X　X
X　X
X　X

「どういう――――――」

「アリア。今はそんな事を言ってる状況じゃない」

まだ言いたい事のある神崎を、遠山が黙らせる。

お前、スゴイ印象変わるんだな。

「信用するかどうかはそちらに任す。撃ちたければ撃ってもいい」

俺は面倒くさいのでこう言うと、操縦席の機械類をチェックする。

・・・・・・・・・・・よく分からん。

高度とか着陸のやり方とかは分かるが、装置の種類とかはあまり覚えてない。知ってるのは必要最低限だけだ。

ちなみに俺がミサイルを打ち落としたすぐ後、ミサイルが飛んできてエンジン部分を二つやられた。

おかげで今は３００フィート・・・・用は海面スレスレまで高度が落ちてる。

『――――３１――――で応答を。繰り返す――――こちら羽田コントロール。ＡＮＡ６００便、緊急通信周波数１２７・６３１で応答せよ。繰り返す、１２７・６３１だ。応答せよ――――』

遠山が通信の相手をする。

「――――こちら６００便だ。当機は先程ハイジャックされたが、今

はコントロールを取り戻している。機長と副操縦士が負傷した。現在は乗客の武貞2名が操縦している。俺は遠山キンジ、もう一人は、神崎・H・アリア。それと・・・・・・」

俺を見て何か言うか迷っている遠山。

「ＢＬＡＣＫ　ＣＡＴ――――黒猫と名乗っておこう」

「ぶ、ぶぶ、ブラックキャット！？」

神崎が変な声を上げて驚く。コイツ俺の事知ってんのか。

「知ってるのか？アリア」

「知ってるも何も！裏では超有名な仕事人よ！二年前に死亡説が流れたけど・・・・・・」

「よくご存知で。一応言っておくが本物だ」

「・・・・・ホントなのか？」

疑いの目を向ける遠山。

「これを見れば分かるか？」

俺は黒い装飾銃を見せる。これを見た瞬間、神崎の顔から血の気が失せた。

「もう・・・・・終わりだわ・・・・ママ・・・・ゴメンね・・・・・」

ちょっと待て。なぜ俺の銃を見ただけでそうなる。

と、ツッコミたかったが・・・・今の俺は言えなかった。

「あ、アリア？どうした銃を見ただけで」

遠山は不思議に思って神崎に聞いた。そして神崎はなぜか大声で叫ぶ。

「ブラックキャットに狙われたものは、二度とマシな人生を歩めないって言われてるのよ！

そして銃を見たものは、やられるときの事がトラウマになって、錯乱状態になって自殺した奴も多いって言われてるし！　来るときは必ず『不吉を届けに来た』って言うし！！」

なんだそりゃ・・・・俺もはじめて知ったぞ。大体あってるが。

「そんな噂は・・・・忘れろ。遠山キンジ。羽田の人達に状況報告を続けろ」

「わ、わかった」

若干顔の引き攣っている遠山を面倒な仕事に当たらせる。

そして一通り済ませた遠山は、続けざまに機内に備え付けてある電話を繋げた

「誰に電話してるの？」

神崎は遠山に聞いた。その次の言葉で誰か分かる。

『もしもし』

電話機に繋げたスピーカーから声が聞こえる。

「俺だよ武藤。ヘンな番号からですまない」

電話をした相手は武藤だったのか。

『キ、キンジか！？いまどこにいる！？お前のカノジョが大変だぞ！』

「カノジョじゃないが、アリアなら隣にいるよ」

そういえば。武藤は車輌科の優等生だったな。

『ちょ……お前！何やってんだよ……！』

「か・・・・・かの、かの！？」

神崎は遠山の彼女扱いされて顔を高速で真っ赤に染め、何か言い出しそうな所を、遠山が神崎の唇を人差し指に当てて止める。

「・・・・・・・・っ！」

神崎はさらに真っ赤になってフリーズした。遠山・・・・大胆になってるな。

「――――――武藤。ハイジャックの事、よく知ってたな。報道さ

れてるのか」

『とっくに大ニュースだぜ。客の誰かが機内電話で通報でもしたんだろ。

乗客名簿はすぐに通信科（コネクト）が周知してな。アリアの名前があったってんで、今みんなで教室に集まってたとこだよ。何人かいないがな』

「薄情な奴らだな」

苦笑した遠山は、武藤と羽田コントロールに今の状況を手短に伝えた

『・・・・・ＡＮＡ６００便、まずは安心しろ。そのＢ７３７－３５０は最新技術の結晶だ。残りのエンジンが２基でも問題なく飛べるし、どんな悪天候でもその長所は変わらない』

羽田からの通信で二人が少しホッとした表情になる。俺は飛んで降りれるから別にいいが。

『それよりキンジ。破壊されたのは内側の二基だって言ったな。燃料計の数字を教えろ。ＥＩＣＡＳ――――中央から少し離れた場所にある四角い画面で、二行四列に並んでいる丸いメーターの下にＦＵＥＬと書かれた三つのメモリがある。その真ん中のＴＯＴＡＬってヤツの数値だ』

さすがは優等生。詳しい描写をありがとう。

「数字は５４０。今５３５。盛大に漏れてしまってる」

俺は一応言っておく。

『だ、だれだ！？』

「俺は黒猫。そんなことより止める方法は無いか？武藤武偵」

『い、いや、止める方法は――――――無い。分かりやすく言うと、Ｂ７３７－３５０の機体側エンジン部は燃料系の門もかねてるんだ。そこを破壊されると、どこを閉じても漏出を止めれないんだ』

「どれぐらい持つんだ！？」

遠山が気になったのか声を荒げる。

『残量はともかく、露出のペースが早い。言いたかないが・・・・１５分ってとこだ』

「チッ。さすがは最先端技術の結晶だな」

「同感だ」

遠山の愚痴に俺もここは賛同する。

『キンジ、さっき通信科（コネクト）に聞いたがその飛行機はそもそも相模湾上空をうろうろ飛んでたらしい。今は浦賀水道上空だ――――羽田に引き返せ。距離的に、そこしかない』

「元からそのつもりよ」

神崎は武藤に声を返す。

『・・・・・・ＡＮＡ６００便、操縦はどうしているのだ。自動操

縦は決して切らない様にしろ』

「オーパイはすでに破壊されている。今、神埼武偵が手動で操縦している」

俺がそういうと羽田の人等は黙った。

「――――――というわけで、着陸の方法を教えてもらいたいんだが」

遠山が無言を破り、羽田に尋ねる。

『・・・・・・・すぐに素人ができるようになるものではないのだが・・・・・・現在、接近する航空機との緊急通信を準備している。同型機のキャリアが長い機長を探して――――』

「時間がない。接近する全ての航空機との通信を同時に開いて欲しい。できるか？」

『い、いや、それは可能だが・・・・・・どうするつもりだ』

「彼らに手分けさせて、着陸の方法を一度に言わせるんだ。武藤も手伝ってくれ」

『一度にってキンジお前、聖徳太子じゃねーんだから・・・・・・！』

「できるんだよ『今の俺』には。すぐにやってくれないか。なにせもう時間がなくてね」

神崎は驚きの眼差しで遠山を見る。俺はどうでもいい。

そして飛行機は暗い上空を飛んで行く。

遠山が１１人の言葉を聞いている時、俺は何気なく思った事がある。

俺が来た意味ない～～。

完全な無駄足じゃねぇか。なんつうことだ。

『ＡＮＡ６００便。こちら防衛省、航空管理局。私は管理局長だ』

ヒュー。そんな方からの通信とは驚きだ。

『羽田空港の使用は許可しない。空港は現在、自衛隊により封鎖中だ』

『何言ってやがんだ！！』

叫んだのは武藤。

『誰だ』

『俺ぁ武藤剛気、武貞だ！６００便は燃料漏れを起こしている！飛べて、あと１０分なんだよ！代替着陸（ダイハード）なんてどっこにもできねぇ、羽田しかねえんだ！』

『武藤武貞。私に怒鳴ったところでムダだぞ。これは防衛大臣による命令なのだ』

――不穏な気配に、横へ振り向く。

ＡＮＡ６００便のすぐ脇に――――Ｆ－１５Ｊイーグル――――――

航空自衛隊の戦闘機が、ピッタリつけてきている。

「おい防衛省。窓の外にあんたのお友達が見えるんだが」

『・・・・・それは誘導機だ。誘導に従い、海上に出て千葉方面へえ向かえ。安全な着陸地まで誘導する』

そういわれて神埼は操縦桿を海上の方向に傾ける。

「「待て」」

・・・・・・なぜか遠山と声が被った。

「とりあえず」

俺はマイクの電源を切る。

「神崎武偵。海に出るのは得策ではない」

「俺も同意見だ。アリア・・・・あいつらは嘘をついてるんだ」

「？」

おお～～この遠山はそこまで見抜くことが出来るのか。

「防衛省は俺たちが無事に着陸できるとは思ってないんだよ。海に出たら、撃墜される」

「そ、そんな・・・・！この飛行機には一般人も乗ってるのよ！？」

「東京に突っ込まれるよりはマシだろうさ」

俺は人事のように言う。

「向こうがその気なら、こっちも人質を取るまでだ。アリア、地上を飛ぶんだ」

ＡＮＡ６００便は横浜のみなとみらいを越えて、東京都に入る。

「で、どこに着陸する気よキンジ。都内に他の滑走路なんてないじゃない」

「なあ、武藤。この機体が着陸するには滑走路はどのくらい必要だ？」

『エンジン二基のＢ７３７－３５０なら・・・２４５０ｍは必要だ

ろうな』

「・・・そこの風速はわかるか？」

『風速？レキ、学園島の風速は？』

『私の体感では、５分前に南南東の風・風速４１・０２ｍ』

レキがいんのか。まあどうでもいいか。

「じゃあ武藤。風速４１ｍに向かって着陸すると、滑走路は何ｍだ？」

『・・・・・まぁ・・・・・・・２０５０ｍってところだ』

「――――――ギリギリだな」

ん？遠山はなにやら案を思いついたらしい。

「ど、どこに降りるつもりなのよ。東京にそんな直線滑走路、ないわ」

「・・・・・・・・・なるほど」

神崎の言葉で思いついた。東京にはそれほどの直線滑走路・・・・・っぽいのがある。

それは――――――。

「武偵高の人工島（メガフロート）の形覚えてるか？南北２キロ、東西５００ｍの長

方形だ。対角線を使えば２０６１ｍまで取れる」

『お、おい・・・・・・・・・・・』

「大丈夫だ武藤、『学園島』に突っ込むわけじゃない」

『・・・・・？』

「突っ込むのは『空き地島』のほうだ。レインボーブリッジを挟んで北側に、同じ人口浮遊島があるだろ？」

『・・・・・お、お前ってヤツは・・・・・とんでもねぇこと思いつきやがる・・・・お前本当にあの遠山キンジか？・・・・・・』

「残念ながら想像の通りだ。そうだろう？アリア」

「なっ、何よそれ」

「答えてごらん？」

何やってんだよ遠山。今はイチャついてる場合なのか。

「キンジ」

「だ、そうだ」

だろうな。もし違ったら俺は眼科に行かなきゃならん。

『・・・人工浮遊島に・・・・・・か。理論的は可能だが・・・・・

・あくまで理論的だぞ』

だろうな。今までに飛行機で、空き島に突っ込んだヤツなんざいるか。いてたまるか。

『でもなキンジ。見りゃわかるだろうが、暴雨と暴風で視界は最悪で、しかもただの人工島だから誘導装置も誘導灯ない。どうやって手動操作で着陸させるつもりなんだ？』

「・・・・・・・じゃあ着陸をあきらめて、一緒に心中するか？アリア」

「き、聞くだけ野暮よ」

だから一々イチャイチャすんな。緊張感が足りない。

『待て、待てキンジ！『空き地島』は雨で濡れてる！２０５０ｍじゃ停止できねぇぞ！！』

「それはどうにかするよ。俺を信じてくれ」

『・・・・・勝手にしやがれ！しくじったら轢いてやるからな！』

そのまま武藤の電話は切れる。

「アリア。この飛行機は東京タワーよりも低く飛んでる。ぶつける

なよ」

「ば、馬鹿にしないで」

新宿のビルを掠めるように飛行機は大きく旋回する。

俺は後ろで壁に寄りかかっていて、遠山は副操縦席に、神崎は操縦席に座っている。

あ、東京湾が見えてきたな。

そろそろ人工浮島が見えてもいいはずだと思うが・・・・・・。

こりゃあ・・・・・やべーな。

着陸できねぇ。

『空き地島』がまるで見えやしねぇ。武藤の言った事は、生憎と当たっていたということか。

「キンジ。あんたなら出来る。できなきゃいけないのよ。武偵を辞めたいなら武偵のまま死んだら負けよ。それに私だってまだ――――ママを助けてない！！」

なんか諦めかけた遠山を神崎が叱ってる？話は分からんが感動的なシーンらしいな。

だが割り込ませて貰うぞ。

「死にたくないか？」

「は？」

「死にたくないかと聞いている」

「そ、そりゃあ誰だって死にたくないわよ！！」

「そうか。では俺たちは助かる方法を教えよう」

「「え！？」」

二人が驚いてコチラを向く。俺は手っ取り早く言う。

「俺のパラグライダー・・・・みたいなもので飛んで降りる。そうすれば助かるぞ」

「なっ・・・・！バカを言うな！！乗客の人達はどうなる！？」

「遠山武偵。言ったはずだぞ。俺たちは助かると」

「くっ・・・・・」

「却下よ」

遠山が押し黙ると、神崎が否定の言葉を言う。

「死にたくないんじゃないのか？」

「それはそうよ。でも私は人を見捨ててまで助かりたいと思わない。すべて救う道を選ぶ」

神崎の瞳は、真っ直ぐ俺の方を向いている。

・・・・・・その傲慢さがどこまで通用するか知らないが、その行く末を見るのも・・・まあいいか。

「それなら・・・・外を見てみろ」

「「？」」

俺が指をさす方向には、ライトの光がちらちらと見える。

『キンジー！見えてるかバカヤロウ！』

「武藤！？」

電話線が回復したのか、武藤からの電話が来た。

『お前が死ぬと泣く人が居るからよぉ！俺、車輌科で一番デカイモーターボートをパクッってきたんだぞ！装備科の懐中電灯も、みんな無許可で持ち出してきたんだ！お前、全員分の反省文書けよ！』

そして何人もの人が回線に割り込み、その声が聞こえてくる。

「こ、こいつら・・・・・・」

遠山が驚いている。そりゃそうだろうが。

しかしアイツらが作る誘導灯だけではまだ足りない。

「仲間を信じ、仲間を助けよ――――――――か・・・・・」

これは俺に似合わない言葉の一つ。だが俺は――――――。

「さて。俺もそろそろいいところを見せるか」

「？」

「遠山武偵、神埼武偵。６秒だけ時間をやる。あとは自分たちで何とかしろ」

そして俺は機内放送のスイッチを入れる。

「『乗客の皆さん。当機は緊急着陸をします。必ず乗務員の指示に従ってください』さて・・・健闘を祈る」

「「！？」」

俺は遠山の声を真似て放送する。二人が驚きでこちらを見る。

「乗客の事も考えてやれ」

そう言って、俺はここから立ち去ろうとする。

「あ、あなた・・・・ホントにあの・・・・冷徹なブラックキャットなの・・・・・・？」

冷徹なブラックキャット・・・・・・・か・・・・・・・・。

「・・・・・・・昔の話だ。しかし俺は・・・・ＢＬＡＣＫ　ＣＡ

T。それに変わりはない」

「待ってくれ。一つだけ聞かせて欲しい」

「なんだ」

「お前は何で俺たちを助けてくれる？」

・・・・・・・答えるべきかどうか・・・・・・まあいいか。

「黒猫が届けるのは不吉だけじゃないってことだ」

そして俺はこの機体から飛び降りた。

「さて。ミスはしない」

俺は飛び降りた後、飛んで『空き地島』の方へと先回りする。

そのすこし後方には飛行機が迫る。

俺は銃をはるか上空に狙いを定める。

慟哭のような大雨を放つ雲が照準だ。

「不吉を届けに来たぜ・・・・・！」

バンバンバンバンバンバンッ！

そして俺は・・・・ある弾を六連射した、ほぼ同時に。

その銃弾は稲妻を纏いながら、空を飛んで行く。

そして――――――――

――――――――ビカアァァァァァ――――――――！

物凄い光が、この場を包む。

俺が放ったのは、特製閃光拳銃弾（フラッシュグレネード）。

通常の五倍以上の効き目がある閃光弾だ。

それの六連射は、休憩時間（インターバル）を入れないで６秒間、輝き続ける。

それがまるで太陽のようになり、『空き地島』を真昼間のようにした。

（今のアイツならこの六秒を有効に使うだろう）

やっと無駄足じゃなくなった事に喜びを感じながら、俺は人目につかないように地面に降り立つ。

６００便はもう少しで『空き地島』に突っ込む。

「後は任せたぜ――――――――正義の味方と継承者」

そして俺はここから立ち去ろうとすると――――――――。

「・・・・トレインって呼んだほうがいいかな」

「・・・・雫」

雫が俺の進路上に立っていた。金色の髪を濡らしながら。

「もう朱智一に戻る。が、好きに呼んでくれて構わない」

「性格が戻ってるよ」

「？　そうか。まあ一度寝ればまたすぐに戻る」

「そう・・・・・・ねぇ一」

「なんだ」

雫は自分から話を振っておいて、言いにくそうに顔を伏せた。なんなんだよ。

「・・・・・・・・これからもＢＬＡＣＫ　ＣＡＴになるの？」

「・・・・・・・・・俺が必要とすればな」

「でもっ！それじゃあ一の目t――――――――」

「俺はこれでいいんだ。裏武偵憲章一条『自分を信じ、全てを偽れ』。俺はこの選択に後悔はしない。自分を信じているからな」

「・・・・・・・・わかった。私に協力できることがあったら・・・・・・言ってよ」

「おいおい。裏武偵憲章を聞いてなかったか？『自分を信じ――――――」

「――――全てを偽れ』。それでも・・・・・貴方の力になりたいの。たとえそれが――――――」

雫は・・・・・その次の言葉を言わない。顔を伏せたままだ。

俺はそんな雫の頭を強引に触る。

「ひゃあっ！？」

「わかったわかった。力借りたいときは遠慮なく言う。これでいいだろ？」

「――――――――うん」

「それじゃあ帰るぞ。今日は色々と疲れた」

そして俺たちは帰路に着いた。

俺は仲間を助ける道を選んだんだよな・・・・・・・。

たとえそれがどんな道だったとしても、俺は信じて突き進む。なんたって、それが俺だからな。

俺必要だったか？（後書き）

原作にちょっと手を加えただけ・・・・・・ですね。

主人公設定

名前：朱智一（あけちはじめ）

性別：男

年齢：１７

身長：１７５ｃｍ

体重：６５ｋｇ

容姿：瞳は金で髪の毛はダークブラウン。本人には自覚がないが結構なイケメン。まあぶっちゃけ、ＢＬＡＣＫ　ＣＡＴのトレインと思ってくれればいいです。

出身：日本

誕生日：４月１３日

所属科目：強襲科（アサルト）。（無理矢理）

性格：周りとの協調性が無く一人で居ることを好む。目立つことも嫌い。決して自分の信念を曲げないストレートな行動もする。ついでにスーパーレベルの鈍感。

武器：Ｓ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｍ２９。世界レベルの威力を持った、銀色のマグナム銃で改造されてる。装弾数６発。

グロッグ１７。プラスチックで補強されている、オートマチック銃で改造されてる。装弾数１７発。

ハーディス。ある金属で出来ていて、独特な形をしている黒い回転式（リボルバー）の装飾銃。装弾数６発。今はまだいろいろな機能が隠されている。

他にもまだ持っている。

技能：早撃ち（ラビットショット）。飛ぶ銃弾を４発同時に、正確に撃ち落す程の早さと精密さを持つ。　しかし普通の銃ではついて来れないので、普段は力を制限している。

跳弾（リフレク・ショット）。弾丸を壁などに当てて、軌道の読みにくい銃撃を仕掛ける。

黒爪（ブラッククロウ）。ハーディス専用の技で、銃身で相手に攻撃する打撃技。

黒十字（ブラッククロス）。黒爪の派生系の技で、黒爪の攻撃を交差させて繰り出す打撃技。

電磁銃（レールガン）。ハーディスから超高速で稲妻を纏わせ銃弾を発射する。詳細は不明。

ほかにもまだある。

能力：すべて不明

経歴：東京武偵高校に入るまで、ある組織のチームに入っていたが、とある理由で辞めてそのまま武偵校へ入った。
過去ではブラックキャット、または黒猫と言うあだ名がつけられている。
その名は、裏社会では知らない者はいないというほどに有名。世間では二年前に死亡している事になっている。
色々な人物のパイプラインを持っていて、一部の教務科（マスターズ）の人に勝手な極秘任務を依頼されることもある。

主人公設定（後書き）

若干ネタバレ気味です。

誤字脱字、感想があったら下さい。

束の間のエピローグ・・・いや次のプロローグか（前書き）

原作とあまり関わらない・・・・どうしよう・・・。

束の間のエピローグ・・・いや次のプロローグか

「朱智君。どういうことか説明を求めます」

「小長谷先生。まず、自分が何故呼び出されたのか、分からないんですが」

みなさんこんにちわ。朱智一君だよ～～。はいすいません、テンション間違えました。

とりあえず報告。

飛行機ジャックは何とか無事に終わった。

そしてその日の朝、クラスの一大事だったのに来なかったってことで、色々と言われた。

俺だって行ったのに・・・・・・飛行機にも乗ったのに・・・・・・十発しか作ってなかった銃弾も使ったのに・・・・。

みんなから理不尽にも何発か殴られた。俺だって活躍したのにぃ！

まあ・・・・・・・・ブラックキャットとしてだけどさ・・・・・。

それはそうと。

今は、何日か経った日の放課後で、特にやることもないので帰ろうと思ったら、放送で呼び出されたので、わざわざ教務科まで足を運んだのだ。そしたらさぁ・・・・・・。

「なんですか。この尋問みたいな対応」

「貴方がブラックキャットとして、騒ぎを起こしたことは分かっています」

「・・・・・騒ぎだなんて人聞きの悪い・・・仲間を助けただけですよ」

「ならばなぜブラックキャットとして行ったんですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「黙っているのは、この状況ではいい判断とはいえないですよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・まあいいです。今回は多めに見ますが、あまり騒ぎを起こさないで下さい」

「・・・・・・・・・・・・わかりました。失礼します」

無言で、俺は教務科から出た。

X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X

「・・・

「まったく」

「じゃあついてくんな」

「やだ」

そう言って俺の隣に走ってくる雫。

「お前が俺の一緒にいると、あらぬ誤解を受けるのだが」

「私は別にいいよ。気にしないし」

「俺がよくない」

そう。

こいつは中身はともかく外見はいいから、この武偵校で驚異的な人気を持っている女子の一人なのだ。

たしかファンクラブも幾つか出来ているらしい。写真とかが高価値で取引されていると言う噂も。

だが本人は気にしてない、もとい無視している。

そんな女子が、目立たないことを心がけている俺の隣にいるのは、ハッキリ言って迷惑。

「何してたの？」

「この前の事件でちょっとな」

「そう」

「・・・・・・まさかとは思うが・・・・お前ずっといたのか？」

「・・・・・・そんなことないけど」

「出たな、お前の悪い癖。お前は嘘つくときには必ず何拍か空ける」

「・・・・敵わないな、一には」

「不本意とはいえ、何年もペアを組んでいたらわかってくるさ」

「不本意は余計だと思うけど」

「気にするな。それより何か用か？」

「あ、いや。特に無いんだけど・・・・」

「そうか。じゃあ俺は部屋に戻るから。また明日な」

「あ・・・・・うん。また明日」

俺はそのまま雫と分かれた。

・・・・・・なんか言いたそうな顔をしていたのは気のせいか？

気のせいだな。

X　X
X　X
X　X

まあ突っ立ってても仕方ない。とりあえず・・・・・・・・・。

「邪魔だし、退かしとくか」

俺は女を蹴り飛ばし、ドアの前から退かす。

そして俺は部屋に入る。

「ん～～。じゃあ風呂に入ってさっさと寝るか」

というわけで俺はクローゼットから寝巻きをだ――――――。

ババババババッ！！

「なっ！？」

いきなり俺のドアが銃撃された！！どういうことだ！？

「チッ。抹殺者（イレイザー）か？」

とりあえず俺は偶然、机の上に置いてあったハーディスを取る。

そして玄関に向うと、黒い影が俺に飛び掛る。手には二本の小太刀。

「甘ぇ！黒爪（ブラッククロウ）！！」

俺はハーディスで小太刀を二本とも叩き折る。

そして俺はその小太刀を持ってる手を掴み、投げ飛ばす。

ガシャァァァン！！

俺の机とかが凹んでしまったがこの際仕方ない。

その影は小太刀を捨てて、俺の机においてあったボールペンを持った。

そしてまた飛び掛る。

「だからお前はアホなのだぁ！！」

若干ネタに走ったが気にしない。

俺はポケットから、閃光弾（フラッシュ）を取り出し地面に投げる。

カッ！という光が部屋を埋め尽くす。

そしてその光の中で見えた。どうやら影の正体は女。

顔とかは見えなかったが髪の長さと体つきからそうだろう。

影は不意を突かれた閃光に動きを止める。俺はその隙に手首を掴み一回転させる。

グルンと女の身体は宙を回り、俺は地面に女の顔を押し付ける。

そして手首を持ったまま女の上に乗り、片方の手を足で踏み動きを止め、頭にハーディスを押し付ける。

「動くな。頭を吹っ飛ばされたくなければな」

その言葉で観念したか動きを止める。

「俺を狙った目的はなんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「黙ってないで言え。誰の指示だ」

「・・・・・・・・あ・・・・・わ・・・・・」

「？　聞こえる声で話せ」

そういうとなぜか大きく息を吸う。

「君が私を、変な場所に放置するからでしょうがぁあああああああああっ！！！！！！！」

大音量で叫ばれました。

XXXX

ちょっと前に、イギリス武偵校からこっちに転校してきた帰国子女。話によると、仕事して帰ってきたのだが、部屋の場所が分からなかったらしく、間違えて男子寮に来てしまい、そこに睡魔も来て廊下で力尽きたらしい。偶然にもそこが俺の部屋の前だったという。

あ、びしょ濡れの訳は、水撒きしてるスプリンクラーの直撃を食らったらしい（笑）

で俺を襲った理由は・・・・・・。

「しかし理解不能だよ。部屋の前で女の子が倒れてたら、普通助けるでしょ」

らしい。これに俺は反論する。

「殺人未遂者に、そんな事言われる筋合いはない」

「それは悪いと思ってるよ。けどさぁ・・・・だからって蹴り飛ばしは無いと思うのだけど」

「シャラップ。そしてさっさと帰れ」

「冷たいねぇ・・・・まあ居る意味も無いし、帰らせてもらうよ」

「おおう、弁償はしないのか」

「君も私の小太刀を壊したからお相子だよ」

そう言って部屋を出ようとするサヤ。

「しかし強いね。さすがはＢＬＡＣＫ　ＣＡＴって所かな」

「！？お、お前！？」

「じゃあ」

そういってサヤは俺の部屋を出る。

俺は身を乗り出して追おうとするが、何時の間にか足がハンカチでベットの足と？がっていた。

ご丁寧にこま結びで。

「い、いつの間に！！」

そして解いて部屋を出たが、もうサヤはいなくなっていた。

「マジか・・・・・俺の正体を知るヤツが・・・・・増えちまった」

なぜバレたかは不明。おそらくハーディスを見たからだろうが。

「また厄介なことに・・・・・・・」

とりあえず部屋に戻る俺。そしてハーディスをそこらに置いておく。

「・・・・・・・・・・新しい机買わないと。あ、そのためには資金が」

あ〜〜、この頃弾とか作ってしまったせいで、お金が底をつき始めているのだった・・・。

「また仕事でもしに行くか・・・・・」

てなわけで俺の一日は終わった。

x　x
x　x
x　x

俺は仕事を求めて教務科（マスターズ）の掲示板に向っている。

「ん？やあ、朱智一君」

「アンタか。ミナツキ」

「名前で構わないよ」

「そうか。それじゃあ俺のほうも名前で構わない」

俺の部屋の扉、及び机を破壊した張本人、そして俺の正体を知る数少ない生徒の一人である、サヤ＝ミナツキが、俺の前方に現れた。

たたかう？にげる？アイテム？

俺は会話するを選択しよう。

「なにをしてるんだい？」

「仕事を取りに」

「奇遇だね。私もなんだ」

「そうか。じゃあ一人で頑張ってろ」

「つれないじゃないか。そこは”一緒にやらないか？”って誘うところだよ」

「ハッ。アンタが俺の部屋の扉か、机を直してくれたら誘ってやる」

「これは手厳しい」

そういいながら俺の隣きて歩くミナツキ。

「何故来る」

「方向が一緒じゃないか」

「それじゃあ俺の後方、１０００メートルぐらいまで離れろ」

「それで離れるヤツがいたら見てみたいよ」

んだこの女。昨日俺の部屋で暴れた次の日には、俺と一緒に仕事をしたいだとか。

「チッ」

「舌打ちされるほど嫌なのかい？ショックだね～・・・・・」

わざとらしく肩を竦めるミナツキ。

「やべっ。マジで撃ち殺したくなった」

「こりゃまた。ＢＬＡＣＫ　ＣＡＴは随分沸点が低いんだね」

「・・・・・・・・・どこで知った？」

俺は殺気を飛ばしながら尋ねる。しかしミナツキは何も怯むこと無く答える。

「顔は知らなかったけど、銃のほうは知っていたからねぇ・・・・・・
まさかとは思ったけど」

「・・・・・・・アンタ何者だ」

「ただの帰国子女な武偵だよ。すこし戦闘能力高めの」

「・・・・・・・・・・・・・」

「そんなことより、そろそろ教務科（マスターズ）につくよ」

「・・・・・・そうか」

そして掲示板の前までたどり着いた。

「さてと・・・・報酬が多くて面倒じゃない仕事は・・・・・・・」

「中々矛盾した事言ってるね」

「二つの延長線上の任務を探してるんだ」

そして掲示板に目を戻す。

・マフィア抗争の鎮圧と早期解決。単位3・2。（強襲科指定。二人以上）

・輸入品の運搬とその警備。単位1・9。（強襲科・探偵科指定。二人以上）

・来日中の要人のボディガード。単位2・1。（指定科目なし。二人以上）

今回の任務はこれだけだった・・・・・・。

「絶望した・・・・・・」

「何を、この世の終わりみたいな台詞を」

一人で出来る仕事が無かった・・・・・二人以上と言う文字がムカツクぞ。

絶望してる俺に対し、ミナツキは少し上機嫌だ。

「どうやら一人で出来る任務はない見たいだねぇ・・・・と言う訳で一緒に」

「クソッ・・・・仕方ない、譲歩しなけらばいけないか・・・・背は腹に変えられない」

「私と仕事するのに、そこまでの覚悟が必要かい？」

「もちろんだ」

「ヒドイ事言うなぁ・・・・まあいいけど。それで何をやる？私は何でもいい」

「そうか？　それじゃあ輸入品のヤツだな」

「そういうと思った」

そして俺は、輸入品運搬の仕事の張り紙をとって、受付に持って行く。

「へぇ・・・服は制服か」

「大方、武偵が乗ってれば襲うヤツなんか、居ないってことだからじゃないか？」

「その通りらしい。それで時間は？」

「この後すぐだ」

「えらい急な仕事を選んだね」

「一番楽でもあったからいいんだ」

てなわけで俺は、激しく気は乗らないが、ミナツキを一緒に連れて行くことにした。

XXXX

「中々のバイクじゃないか」

「わかるのか？」

「いや、全然だけどね」

そしてミナツキがトライクに乗るときに、スカートの中の銃がチラリと見えた。

「スプリングフィールドＸＤＭ・・・・・・なんつー銃を」

「やっぱり目立つ銃なのかい？私は普通に使っているけど」

「そりゃ最新の銃だし目立ちもするさ。それも二丁だろ？」

「私は双剣双銃（カドラ）が得意だから仕方ないのさ。集めるの結構苦労したんだよねぇ」

「まあ俺には関係ないが」

「そういえば。君の使ってる銃はＳ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｍ２９とグロック１７だったかい？君も充分変わってると思うけど」

「悪かったな。俺は回転式（リボルバー）が好きなんだよ」

「まあＸＤＭはグロッグの兄弟銃みたいなものだし、お似合いなのかな？」

「やめろ気持ち悪い。Ｓ＆ａｍｐ；Ｗで打ち抜いてしまいそうだ」

「S&Wの威力は勘弁して貰いたい」

そんなこんなで俺はバイクを走らせた。

xxxx

「それもそうかな」

そしてバイクを走らせる俺。車の渋滞も無くスイスイ行けている。

この調子でいけば、普通に終わるな。

俺はふと、バックミラーを見ると気になるものを発見した。

「ミナツキ」

「名前で構わないよ。一君」

「それは置いておくぞ。で真っ黒い車が数台、俺たちの後を付けている気がするんだが」

「う～ん・・・・・私の目にも見えてるが、見るからに怪しいねぇ・・・・」

そして黒い車の窓が開き、中から黒い帽子とサングラスをかけた男達が、マシンガンを持ってこちらに構えてきた。

「絵に描いたような奴らだ」

「狙われる理由に心当たりは？」

「ありすぎて困る。だがそっちも少なからずあるんじゃないか？」

「まあそうだね」

「だが武偵憲章は守らないといけないよな」

「任務は完遂するって事かい」

ババババババババッ！！

奴らがマシンガンをぶっ放してきやがった。俺はジグザグに走行してかわして行く。

「俺は運転してるから、攻撃はよろしく」

「はぁ・・・・仕方ない・・・・Ｓｉｌｖｅｒ　ｗｏｌｆの力でも見せるかな」

そう言ってスカートから銃を取り出す。

「シルバーウルフ・・・・銀狼・・・・・・アンタがか・・・・？」

「覚えてたのかい？」

「・・・・・俺の記憶が正しければ、銀狼は男だったと思うが」

「それは私の父。だから正確には銀の若狼さ」

「そうか・・・・・」

「てっきりもう覚えてないかと思ったよ」

「俺を恨むか？」

「別に。ちょっと恨みは持ってるけど、そこまでじゃない」

「恨んでくれても構わないが、敵となるなら容赦なく潰す。それは覚えておけ」

「はいはい・・・黒猫にはかなわないからね」

「よし。じゃあこの話は置いておくぞ。さっさと反撃してくれ」

実は俺はこの会話の間も、マシンガンの銃撃を避けている。

「了解」

ＸＤＭから銃弾が放たれる。車の窓とかを割る。中にも同じ格好をした男が数人。

「牽制程度にしかならないよ」

「トライクの中に色々と入ってる」

「へぇ・・・・どれどれ・・・・・武偵弾のオンパレードじゃないか」

「知らなかったか？俺は武器商人としても一流なんだ」

「黒猫は底が知れないねぇ・・・まあありがたく使わせてもらうよ」

「閃光弾だけだからな。あとあまり使うな」

「了解」

そして銃弾を装填して何発か放つ。

光を放ち、黒ずくめの男たちは一時的に目をやられて、狙いを定められなくなる。

だがマシンガンを乱射して、一台の民間乗用車を撃つ。

乗用車はスピンして、他の車とぶつかり炎上する。

「こんな景色、よく洋画で見るね」

「００７ぐらいしか俺は知らないがな」

その後も俺たちは追われて、その騒ぎに巻き込まれて、乗用車がガードレールやらなにやらにぶつかって次々と炎上する。

「しつこい奴らだ」

「一か八かスピードを落として、接近しなきゃいけないと思うのだけれど」

「そうだな。それじゃあ止めるぞ」

俺は急ブレーキをかける。

「キャ！」

横で可愛らしい悲鳴を上げてるヤツがいるが放置。

そして銃を構える。

「炸裂（バースト）・電磁銃（レールガン）。シュート」

ドウンッ！という音と迸る稲妻と共に銃弾が打ち出される。

その銃弾は相手の車の一つにぶつかる。

ドガァァァァァァァンッ！！

車ははるか上空に飛び上がる。

「汚ねぇ花火だぜ」

「洒落になってないよこれは」

他の男どもの車はそれを見るなり、何処かへ引いていった。

「ちゃんと加減はした」

「アレでかい？」

「本気ならあんな車、塵も残さず消えてしまってる」

「恐ろしい事言うねぇ・・・・」

「そんじゃあ生きてるだろうから、武偵校に連絡して拘留しておいてくれ」

「君はどうするんだい？」

「任務は完遂する」

俺は木の箱を取り出す。

「なるほど。それじゃあ行ってきな」

「ああ」

そして俺は再び、バイクを走らせる。

このとき、俺は気付いてなかった・・・・・・。

はるか彼方から、俺を監視していた人物がいたことに・・・・・・・・・。

束の間のエピローグ・・・いや次のプロローグか（後書き）

サヤのキャラは変更しました。理由は特にありません。

しいて言うなら、書きにくかったからです。

誤字脱字、感想があったら下さい。

俺の平穏はどこへ・・・・・

俺は今、自分の部屋で読書をしている。

少し報告があるので報告。

放課後にあった任務中の襲撃をした男どもの話はこうらしい。

『お、俺たちはイギリスのマフィアで、ある依頼で日本にきたんだ。そして魔剣(デュランダル)となのる人物に、この学校に通うこの男を抹殺して欲しいと依頼されたんだ』

そして男は俺の顔写真を出したらしい。

魔剣(デュランダル)。

すこし前から話題となっていた、超偵ばかり執拗に狙う指名手配犯。素顔を見たものはいなく、そもそも本当にいるかも分からないため、都市伝説と化して来ている。

今回のその人物は、本物か名前を使っただけなのか・・・・。

今回の事件のことは、一部の教務科(マスターズ)しか知られてなく、俺も極秘に

調査をしなくてはならなくなった。

ミナツキも知ってしまったんだが。ちなみにあいつは協力してくれるらしい。

「少なくとも、魔剣(デュランダル)は俺の正体を知っているだろうが・・・・・・」

マジ面倒くさい。平穏がどんどん崩れていってる。

「まあ、あのときよりはマシだが・・・・」

そして俺はクローゼットに入っている、ハーディスを取り出す。

「これのせいで魔剣(デュランダル)に狙われているのなら・・・・捨てちまおうか」

って言ってホントにこれを捨てるようなやつは、この世にいないだろうが。

「そして・・・生徒会長の警護とか・・・・」

実は、生徒会長も魔剣(デュランダル)に狙われてるらしく、一緒に行動した方が何かと都合がいいらしい。もちろん、俺の正体は伏せて単なるボディガードってことになってるが。

「今日は寝るか」

今日の回想はここで終わらせ、次の日に備えさっさと寝よう。

X　X　X
X　X　X
X　X　X

「一応、生徒会長のボディーガードの仕事として来たんだが・・・・・」

「あ、最後の一人ってお前か。今は白雪の荷物整理してるところだ。手伝ってくれ」

「おう」

そして俺は遠山の部屋に上がる。

「？　誰よアンタ」

窓に何かをくっつけようとしている神崎が、俺に聞いてきた。

「一応クラスメイトだ神崎。まあ俺は、お前らと違って目立たないが」

「ちょっと待て朱智。今の言葉に俺は異議を唱える」

「何をだ？噂の女たらし」

「お前・・・・・・・」

地味にハーレムを目指してる遠山君はさておき。

俺は一般武偵の部屋とはいえない、要塞部屋を見渡す。

「赤外線探知機を付けすぎると、かえって自分達の活動の妨げになる・・・・・ってまあいいか」

困るのはあいつ等だし。俺の目的は魔剣（デュランダル）の確保で、ボディーガードは表面上の理由でしかないしな。

そんな思考をしていると、玄関の扉が開く。

「おじゃ、ま、しまーす・・・・」

言葉を噛みながら部屋に入る生徒会長がいた。

「生徒会長。お初にお目にかかります。二年生強襲科所属、朱智一です。今回は教務課からの要請があったため、自分もボディーガードに加わることとなりましたので、よろしくお願いします」

一応礼儀正しく俺がここにいる理由を話す。生徒会長には敬語だろう。

「あ、そうですか・・・こちらこそよろしくお願いします」

生徒会長も腰を９０度曲げるようなお辞儀をしてくる。体柔らかいんだな。

「自分は基本的には外で待機しますので、側近は遠山と神崎を」

「いいんですか？」

「ええ。初対面の野郎が傍にいるより、親しい仲の人が傍にいたほうが、安心できるでしょう」

「わ、わかりました・・・・・」

言葉を詰まらす生徒会長。その視線は神崎の方を向いている。

「じゃあ遠山。男女比率、２：１で頑張ってくれ」

「お、おう・・・・・しょうがないか・・・・・」

意外と話の分かる遠山君だったとさ。

そして俺は部屋を出た。

ｘ　ｘ　ｘ
ｘ　ｘ　ｘ
ｘ　ｘ　ｘ

「は、ハジメ！」

俺が男子寮の近くで見張りながらも、ボーっとしてると雫が走ってくる。

「よぉ」

「何が”よぉ”よ！私聞いてないよ！？」

「悪いが話が分からん」

「だから生徒会長と同棲するってヤツ！！」

「・・・・・・・・・・は？」

俺には日本語が理解できなかった。こいつは今なんて言った？

「セイトカイチョウト、ドウセイ？」

「そうだよ！！今、いろんなところで噂になってるし！！」

「・・・・・・・・・まず訂正したいが、俺は生徒会長と同棲する訳じゃない」

「ほ、ホント？」

「本当だ。俺がそんなことする訳ないだろ」

「そ、そうなんだ・・・・・」

なぜかホッとした表情になる雫。おいおい、ホッとしたいのはこっちだ。

「誰だよそんな噂流したやつ・・・・」

「さあ・・・・私は知らないけど」

「まあいいか」

「いいんだ」

「それよりも。魔剣(デュランダル)っつう野郎が俺に喧嘩を売ってきた」

「それって都市伝説の？」

「それは知らんが、俺の正体を知っていた」

「え！？」

「だからお前の正体も知ってる可能性が高い。充分に注意しておけよ」

「・・・・わかった。一もね」

「魔剣(デュランダル)が来てくれるなら万々歳だがな」

「そうだね」

「そんじゃ、俺は帰るわ」

「あ、そう。それじゃあね」

「ああ」

そして俺は自分の部屋へと向った。

X X X
X X X
X X X

そういえば、遠山が風邪を引いたらしい。生徒会長はそれの看病を。
神崎は知らん。
で、俺はというと・・・。
「自分の部屋でのんびりだぜ」
俺は自室で一人、マンガを読んでいる。
警備？知るか。自分の身ぐらい自分で守れ。
せっかくの休憩時間、任務なんかで潰されてたまるか。
――――――ピンポーン。
そんな至福の時をインターフォンが邪魔した。
「誰だこんな時に・・・」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9393n/

緋弾のアリア〜〜縛られた銃〜〜

2011年4月1日03時35分発行